

当別文芸の会だよりNO,44

H25・11/25 発行 (連絡先・河地良一 TEL23-2103)

11月の読書会は久保俊治の「熊撃ち」でした

初雪が大雪となった今冬でしたが、11月16日(土)の読書会には10名のメンバーのみなさんが参加されました。

今回の司会進行は村木一枝さんに担当していただき、小学館文庫の「熊撃ち」を取り上げました。作者の久保俊治(くほとしはる)は昭和22年(1947)に小樽で生まれ、狩猟を趣味とする父の影響で、生涯を狩猟で生きる道を選びます。自ら山に入り自然の中で熊や鹿を追う生活です。そうした体験をまとめたのがこの「熊撃ち」です。

みなさんの感想は、「自然の描写がすごい」「手に取るように自然のようすが分かる」「生きものを食べていながら、自分が手を下さないだけだった」「結局、他の生きものを食べることで自分は生きているんだ」など、生きる根源を考えさせられたという声が多く聞かれました。また、猟犬フチとの交流、その死に「涙した」という感想も大方の声でした。作者は現在どんな暮らしをしているのだろうかとか、マスコミを意識してなどの声もありましたが、今回は読んで良かったというのがみなさんの感想のようでした。

これからも、色々なジャンルの作品を(こだわらず)読んでみたいものです。「読書の偏食を無くする」のも、この「文芸の会」のいいところでしょうか。

12月の読書会は葛城紀彦の「北の湖」です

次回の読書会は12月14日(土)13:30より白樺コミセンです。

葛城紀彦(かつらぎのりひこ)は明治38年(1905)、和歌山県生まれの作家で、「北の湖」は昭和31年(1956)の文学界新人賞候補作品、同年の芥川賞候補作品になっています。この「北の湖」は昭和29年の洞爺丸台風で青函連絡船の座礁沈没で亡くなったアメリカ人の手記から物語が進められます。当時の事故を思い出しながら、遭遇した人の運命に思いを馳せてみましょう。お楽しみに。

「当別文芸」第4号の原稿を募集しています

今年6月末に発行した「当別文芸」(第3号)も、メンバーのみなさん、協賛企業・団体、町内3店舗のご協力で、ほぼ予定した冊数の実費頒布の目途が立ちましたので、第4号の編集作業を年明けから始める予定です。

そこで、メンバーのみなさん、町民のみなさん・ゆかりのある方々の原稿を募集しています。締め切りは1月末です。問合せは代表(河地)までお願いいたします。

今回の範囲は、第四章第五節から第八節までで、話題提供者は竹原一孝さんです。

あらすじは伊達邦夷が第二回目の移住者を募ろうと故郷の岩の山嶺に戻り、その帰還を祝う宴の場面から始まります。本膳が終わって会席の膳が始まり無礼講となり、篠崎彦助は娘婿玉目三郎の安否を阿賀妻に尋ねます。途中、阿賀妻は吉原兵太郎から呼び出され彼の自宅で切腹を求められます。それを一喝して退けた阿賀妻は、妻の兄宅で後味の悪い思いを漢詩にしたためていると、邦夷からの要請で江戸へと旅立ちます。

第五節では、宴会が無礼講になって乱れるのを、邦夷は退かずに待っていた…という指摘もあり、移住派と反対派のせめぎ合いが話題になりました。

第六節では、吉原たちの「切腹しろ！」との要請に、阿賀妻が開き直って一喝する場面が話題になりました。北海道へ移住すべきか、それともこの地に残って先祖の墓を守るかさまざまでしたが、この場面がクライマックス（第7回の？ それとも全篇の？）という意見が多く、阿賀妻のリーダーシップに対する共感の声も出ました。ここで大いに盛り上がって、つづく七・八節はあまり深めることができませんでしたが、読み方によって内容の捉え方が大きく変わってくるなど、読みが広がっていくことを感じさせられました。

次回は第四章第九節から第五章第二節までで、話題提供者は菊池さんです。

<文責 東前>